

Title	裴秀禹貢地域圖のスケールについて
Author(s)	森, 鹿三
Citation	東洋史研究 (1938), 3(5): 424-425
Issue Date	1938-06-28
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145626
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

裴秀禹貢地域圖のスケールについて

森 鹿 三

裴秀 (224—271 A. D.) 禹貢地域圖は支那の地圖

を論ずる者の必ず言及する所であるが、その分率即縮

尺に關しては未だ分明ではないやうである。内藤湖南

先生もその『地理學家朱思本』に於て、馬徵麟が裴氏十

八篇は二寸を以て千里となすといふも、何を根據とし

てゐるのか詳らかにせぬと言つてゐられる。然し二寸

を以て千里となすといふ馬氏のこの説は、隋書^{卷六}十八宇

文愷傳に「昔張衡渾象以三分爲一度。裴秀輿地以二寸

爲千里云々」とあるに據つたのであらう。この二寸千

里説にも必ずしも従ふわけにはゆかぬ。といふのは、

北史^{卷六}十宇文愷傳には「以一寸爲千里」とあつて、孰

れを正しとするか決し難いからである。私はこの二説

よりも、むしろ傳暢の晉諸公讚^{北堂書鈔卷九十六所引}の記事を以

て實を傳へたものと思ふ。從來支那の地圖を論ずる人

達が引用してゐないやうであるから左に紹介する。

司空裴秀。以舊天下大圖用緋八十疋。省視即難。事

又不審。乃裁減爲方丈圖。以一分爲十里。一寸爲百

里。備載名山都邑。王者可不下堂而知四方也。

傳暢は晉書^{卷四}十七に傳あり。それによると東晉成帝の

咸和五年 (330 A. D.) に卒してゐるから、裴秀の時

代とは五六十十年しか距たつてゐない。又隋書經籍志晉

諸公讚の條にはその職祕書監とあれば恐らく裴秀の圖

を親しく見たであらう。さればこそ、前掲の精細な記

事を書きえたのではなからうか。宇文愷の言よりも信

憑するに足ることは言ふまでもなからう。

帛一端は幅二尺四寸、長一丈であるから、方丈圖を

作るには一疋の帛があればほど間に合ふ譯で、舊天下

大圖が緋八十疋を用ひたのと比すればよほどの裁減で

ある。方丈圖といへばその大體の大きさは東方文化研究所で編纂した『東亞大陸諸國疆域圖』の四倍大位である。この疆域圖のスケールは四百萬分の一であるが裴秀の圖は一寸百里であるから百八十萬分の一といふことになる。この一寸百里といふ縮尺は、裴秀の説を

遵奉した唐の賈耽の圖にも繼承されてゐる。支那の古地圖の縮尺については、他日詳しく考へてみたいと思つてゐるが、今はたゞ傳暢の記事を紹介するにとどめる。

雲岡便り

水野 清一

雲岡も漸く暑くなりました。綠陰も深くなりました。一個月前は洞窟内の調査に足の先が冷えて困りましたが、やつと洞窟内の涼しさが慕はれるやうになりました。濃い緑のかたまりは柳です。大地は漸く青味を帯びて來ました。空は飽くまで青く、夏雲がたゞよつてゐます。川幅だけの谷間ですが、低い丘で晴々としてゐます。時間改正で、内地と同じ時間にになりましたから、七時頃にはまだ太陽が第三洞の丘の彼方にあり、その代り夜の八時頃まで明るく夕方の靜かな景色を嘆賞してゐます。見物人は毎日

多くうるさいものですが、それがたまさか今日のやうに來なくなると何だか淋しいやうな氣がします。石窟の調査はとにかくとして、このほかに殿堂樓閣もあつたらうと搜索に努めてをりますが、未だに瓦の一片だに現れません。第九、第十洞、通稱五華洞の前を發掘して前面にあつた建築物の正體を確めようとしてゐます。磚を敷きつめ、切石を積んだ、大きな礎石の建物下部に出て參り、發掘監督の小野君は力んでゐます。果して遼金時代にまで遡りうる遺構かどうかを確めようとしてゐますが、出土の瓦が少く困つてゐます。しかし、相當に堂々たる建築物で、現在の伽藍よりははるかに大規模です。